総合政策学部
OFFICE

横山　陸 准教授

性差別や人種差別が問題になるいま、人はどんなときに傷つき、怒り、恥じるのかを、身近な日常から出発して考え、そこから新たな社会づくりへの道を探していく。

最近、LGBTやセクシャルハラスメント、肌の色の違いを異端視する人種差別の問題などがマスコミやSNSを騒がせている。横山先生の研究は、「人間とはどういう存在か」という問いを中心に据える哲学的人間学。性的な傾向や人種の違いなどが原因で、人間はどんな場合に傷つき、あるいは怒るのかを、身近な体験のなかから、見えるようにしていく。キーとなるのは、感情的に結び付くこと。そこから、差別される側にある人々を私たちの社会に含め、共に学びながら新たな社会を創りあげていくためのアプローチが始まります。

〝感情〟を糸口に少数者と向き合う

横山先生が6年間学んだのは、哲学をはじめ多くの思想の源となったドイツ。そこで「人間とはどういう存在か」を研究する哲学的人間学と出合います。

「従来の哲学は世界がどうなっているのか、神はいるかいないか、など本質や原理を問いの中心としていました。対してこの学問は、哲学や自然科学が見ずに通り過ぎた〝人間に現れるもの〟を特に日常の経験から出発して考えます。

哲学的人間学を創設したドイツのマックス・シェーラーを専門に研究してきましたが、彼が〝人間に現れるもの〟のなかで、特に愛する、怒るなどの〝感情〟に注目したように、私も感情を通して人間という存在を考察してきました。

近代哲学は理性や知性を強調し、感情をネガティブに扱ってきました。私たちも『感情的な人』と言うようにネガティブに扱うことが多いですね。でも、実は私たちの日常は感情に彩られていて、しかもその人にとっての価値を合理的に反映するものでもあります。また、感情は個人の内面にあるだけでなく、他の人と共有されうるものでもあります」

さて、この感情について総合政策学部では、どのようなアプローチが考えられるのでしょうか。横山先生は次のように語ります。

「こうした感情を糸口にして、個人の性や文化的・民族的出自の多様性や差別について考えていきます。

例えば〝ハラスメント〟はこれまでも現れていたはずなのに、目に見えてこなかった。それを見えるようにするために、感情を糸口に自分のこととして共感することで向き合っていきます。性的少数者への処遇や、特定の人種・民族に属する人への差別をあおるヘイトスピーチが問題になっていますが、これらのケースでマイノリティ（少数者）の人々に向かって「マジョリティ（多数者）である我々と同じになれ」と言うのが『同化』です。これに対し『マジョリティである私たちも一緒に学び変わっていきましょう』というアプローチが『社会統合』であり、似た考え方で『マイノリティの人たちを、もう一度、社会に含めて考えていきましょう』というアプローチを『社会包摂』と呼びます」

横山 陸（よこやま りく）

1983年東京生まれ。2008年、早稲田大学第二文学部卒業、2018年、一橋大学大学院社会学研究科博士課程修了。ドイツ・フライブルク大学助手、スイス・バーゼル大学客員研究員、日本学術振興会特別研究員を経て、2019年より現職。博士（社会学）。主要著書に『宗教現象学の自己贈与と自己所与』（ドイツ語共著、2018年）、『体系的および歴史的観点からの人格概念』（ドイツ語共著、2019年）などがある。

なぜ傷つくのかを共感を通して知る

マイノリティに対する「同化」の圧力がさまざまな摩擦を生じさせています。総合政策学部としては、よりよい社会づくりに向けて「社会統合」や「社会包摂」の可能性を探ることになるのでしょうか。ここで改めて、〝感情〟を糸口としてアプローチする方法について、横山先生に説明してもらいました。

「いきなり何も知らない人に共感するのは誰でも難しいですね。そこで、友人がマイノリティであったり、家族に障がい者がいたり、そうした親しい関係で培われた経験に基づいて、そこで生まれる感情的な結び付きを通して見ていきます。そうすると、マイノリティの人たちの心の傷や羞恥、憤りといった感情を共有できるでしょう。人はどういう場合に傷つくのか、何を恥じ、何に怒るのかより深く理解できるでしょう。そして、それを社会の問題として位置付けていくこともできるでしょう。このようなプロセスは、やはりエモーショナル（感情的）な関係からしか見えてきません。

性的マイノリティの人や外国人、障がい者の人たちは、これまでも日常に存在しながら、社会は見ようとしてこなかった。見えるものなのに意外に見えていなかったのです。そのように、見えなかったものを見えるようにするために、皆さんの日常の経験を活かしていってください。あなたが自分自身や他者の〝生きづらさ〟を抱えているとしたら、それはチャンスでもあるのです。

幸い総合政策学部は、既存の哲学や社会学、あるいは文学にとらわれず、社会そのものを問い直すことができる学部です。例えば社会学は、どちらかと言えば事実を記述する学問で、社会調査などを使って『それはこうだ』と説明します。対して哲学は、経験を通した事実を手掛かりに概念を再構成し『こうあるべき』と言える学問です。

感情を糸口に（マイノリティである）他者とは、自分とは、そしてそのためにあるべき社会とはについて考えていってください」

時代と共に変わる倫理や規範

マイノリティの怒りや痛みに共感することを通してあるべき社会を考えるとき、倫理や規範をどう変えていくかという問題にぶつかります。そこで改めて横山先生に、その点を説明してもらいました。

「例えば『社会統合』を考えるとき、規範的な概念として『人権』や『人格』がありますが、これは時代と共

とき人格という概念に性的アイデンティティが含まれるという具合に、この概念が変わったということです。同じように川崎市などでヘイトスピーチの禁止が条例化されたことは人種民族的なアイデンティティが人格に含まれたことを意味します。中央大学でも２０１７年に『ダイバーシティ宣言』を策定しましたが、これも20年～30年前では考えられなかったことですね。ＬＧＢＴの問題でも地方自治体で法整備が進む流れにありますが、このように人格という概念は変化するわけです。あるいは宗教的アイデンティティを人格に含めるのか。含めるなら〝ハラールフード（イスラム教徒用の食事）〟に配慮しないといけない。これも中央大学のカフェテリアで広がっていますね。また、日本でも障がい者への配慮が義務化されましたが、これは身体的障がいによる不便さが、我がままではなく配慮されるべきだに変化しています。たとえば、東京の国立市でゲイの学生が周囲にアウティング（本人の了解を得ずに暴露）されて自殺するという事件がありました。この事件の後で、市はアウティングを禁止する条例を制定しました。このように、これまでも現に存在した差別が、私たちの目に見えてくることで倫理や法規範が整備されてくることが現実にあります。このと、人格という概念に身体性が含められたことを示しています。こうした動きを注意深く見ていく必要があります」

ＳＮＳも視野に入れつつ新たな政策を提言していく

横山先生のゼミは、具体的にどんなステップで展開されるのか。その点について、先生に伺いました。

「これまで述べてきたマイノリティの人たちと差別について、多くの思想を生んだドイツを中心とするヨーロッパ社会と比較しながら現代の日本を考えていきます。

２年生、３年生はそれぞれ、研究の核となる日本語の専門文献を読みながら、１学期に一人１回の発表を行って理解を深め、休暇を使ってレポートを作成してもらいます。そう

各自が日頃からもっている関心事や、友人・家族などの身近なマイノリティの存在を通して、自由な意見交換を行う。いま最も最も身近なテーマだけに議論は活発だ。

して自身の関心を少しずつ明確化しながら、卒論に向けて論文のテーマを絞り込んでいきます」

現代におけるハラスメントなどを扱ううえで、ＳＮＳは避けて通れないインターネット上のツールです。横山先生はＳＮＳに対して次のような見方を語ります。

「19世紀から20世紀にかけて、感情的にわっと湧き上がるのを特長とする『大衆社会』が生まれ、その終着点が『ファシズム（全体主義）』という悲劇でしたが、ここ10年くらいのＳＮＳで、それが違う形で起きている気がします」と語る。「いわゆるトランプ現象やイギリスのＥＵ離脱、日本で言えば生活保護受給者へのバッシングなど再び〝感情〟と政治が結び付いてリアリティをもってきたのがここ10年～15年の傾向ですね。他方で、数年前、溺死したシリア難民の男児の写真がきっかけとなってドイツのメルケル首相が難民受け入れを決めたように、社会包摂を促す一面もあるでしょう」

物心がつく頃にはインターネットやパソコンが普及していた〝デジタルネイティブ〟に属する学生たちもこうした現代に特有の環境には興味があるのだとか。

「『書きたい、つぶやきたい、画像を発信したい』というＳＮＳならではの欲求を、自己を認めてほしい「承認欲求」の一つとして研究する学生もいます。愛とか共感は、いわゆる現代的な承認という側面もあります」

そしてゴールについて横山先生は改めてこう語ります。

「社会学者のマックス・ウェーバーは学問と政策を区別して論じましたが、現代では学問にも政策提言が求められています。その最先端を行くのが総合政策学部で、しかも哲学・倫理学はそもそも『こうあるべき』という考え方を提示できる学問です。これまで述べた考え方や方法に従って、学生には最終的に、ありうべき規範や理念を卒論で示してほしいと思います」

「感情」や「同情」など、横山先生の研究の本質に当たる題材について書かれた書籍を読んだうえで発表やレポート作成を実行。特に３年生では相反する２つの見方を比較しながら学ぶ。

横山先生が主宰する外国の研究者を迎えた講演会。独仏の現代哲学者の思想を概観しながら、死について哲学的に考える。

高校生の皆さんへ

卒業後の進路として企業に入社するにしても、公務員になるにしても、ある組織に入ることに変わりはありません。したがって皆さんには、そこで常に企画や政策を提案できる人になってほしい。総合政策学部はそのための訓練の場でもあると思います。そこで学生に期待したいのは、自分で問いを立てて関心をもち、それをアウトプットして答えていく能動的な姿勢です。

最近の学生で、いろいろ興味はあるがそれを形にできない、という人も目立ちます。「これじゃない、あれじゃない」と悩んでしまう。そういう学生には、まず何でもいいから書いてみる、「これは違うな」と思っても形にしてみる、ことを勧めています。そうすると「これは違う。むしろやりたいことはこっちだ」と見えてくるものが必ずあると思います。